

設立記念シンポジウムに寄せて



神戸大学理事・副学長
小川真人 氏
(研究・産学連携担当)

ただいまご紹介いただきました、研究・産学連携担当の神戸大学理事・副学長の小川真人でございます。

本日は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科のアクティブエイジング研究センター設立記念シンポジウムに多数ご参加いただき、誠にありがとうございました。このセンターは、今日地球的諸課題の一つとなっている「高齢化社会」という問題に対し、「アクティブエイジング(活力ある高齢化)」という視点から、産学官民が共同して学際的研究を進めていくために設立したもので、神戸大学といたしましても、この分野にひとつの研究基盤ができたものと、非常なよろこびをもって捉えています。

ところで、神戸大学は、昨年4月に武田廣学長が就任されて以来、「先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学」を目指す「武田ビジョン」を掲げ、様々な分野で連携・融合の力により世界最高水準の教育研究を行っていかうとしています。そこでは、文系・理系という枠にとらわれない先端研究を推進し、他の大学・研究機関と連携しながら、新たな学術領域を開拓し展開しています。

また、海外中核大学とも共同研究や連携教育の重層的な交流を図り、世界各地から優秀な人材が集まり、同時に世界へ飛び出していくハブ・キャンパスとしての機能を飛躍的に高めていかうとしています。さらに、これらの教育研究を社会と協働して推進し、先端的技術の開発と、研究成果を社会問題解決のために応用、展開する社会実装を通じて人類に貢献するとともに、地球的諸課題を解決するために先導的役割を担うことのできるグローバルな人材を育成するため、様々な取組を行っています。

このようななか、昨年12月人間発達環境学研究科に、新たにアクティブエイジング研究センターが設立されました。このセンター

は、先ほども申しましたとおり、「高齢化社会」に関わる複雑な問題に対し、産学官民の連携をとって解決を目指す学際的な研究センターで、とりわけ高齢化の進行が進んでいるアジア地域の大学・研究機関とも積極的につながりながら、グローバルな形でアクティブエイジング研究を推進する拠点の役割を担うことを目指していると聞いています。

このようなセンターの目標は、神戸大学が現在戦略として掲げる文理融合研究、研究成果の社会への実装、実戦型グローバル人材育成などと、まさに関連しております。その意味で、神戸大学といたしましても、このアクティブエイジング研究センターの今後の活動に、強い期待を寄せています。

私の個人的な関心は、実は、今年年男でして、所謂「熟年」「マチュアード」の世代に入るところでございます。個人的にも、アクティブエイジング研究に興味を持っております。そういった意味で、アクティブエイジングセンターの今後の活動に非常に強い関心を抱いております所でありませうけれども、本日ご出席いただいたみなさまには、このセンターのこれからを暖かく見守っていただき、積極的なご支援をたまわりますよう心からお願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

開会挨拶



神戸大学大学院
人間発達環境学研究科長
岡田章宏 氏
(神戸大学大学院
人間発達環境学研究科附属
発達支援インスティテュート長)

ただいまご紹介いただきました人間発達環境学研究科長の岡田でございます。

本日は、アクティブエイジング研究センターの設立記念シンポジウムに、このように多くの方にご臨席をたまわり、研究科を代表して御礼申し上げます。

本日は、お忙しいなか、このシンポジウムのために、アクティブエイジング研究において世界的に活躍されているお三方にお越しいただきました。高いところからではございますが、心より感謝申し上げます。

お三方につきましては、後ほど詳しい説明があると思いますので、私の方からは、お名前のみご紹介させていただきます。お一方目が、WHO神戸センターの所長であるアレックス・ロス様です。ロス様には、このあとすぐに「アクティブエイジングの歴史と進化」と題する基調講演をお願いしております。お二方が、韓国・ソウル大学応用老年学・退職研究センターの所長をされておられますGuonghe Han先生です。ハン先生には、午後の特別講演1として「アクティブエイジング社会のために大学は何ができるか」と題するご講演をお願いしております。お三方目が、東京大学高齢社会総合研究機構特任教授の秋山弘子先生です。秋山先生には特別講演2として「長寿社会に生きる」と題するご講演をお願いしております。どうぞよろしく願いいたします。

さて、本日、お披露目するアクティブエイジング研究センターは、昨年の12月に私どもの研究科内に発足しました。その活動の詳しい中身につきましては、このあと、同センター長の近藤徳彦教授から説明していただくことになっておりますので、私の方からは、発足に至った背景を簡単にご紹介したいと思います。

私ども人間発達環境学研究科といういささか長い名称を持った研究科は、人間の発達とそれを支える環境を対象にして、実践的な観点から教育と研究を行うことを目的としています。「人間の発達」、英語で言いますと“human development”という言葉になりますが、この言葉は抽象的でややわかりにくい言葉なのですが、私どもは、それを「一人ひとりが幸福な人生を実現するため—ここで「幸福な人生」といいますのは、英語で“well being”になります—、それぞれが潜在的にもっている多彩な能力を開花していくプロセス」と理解し、それを乳幼児の頃から高齢期に至るまでの「発達」のあり方として教育・研究をしているわけでございます。

こうした研究は、様々な生活場面に発生する具体的な問題と密接に関わっておりますので、必然的に分野横断型の学際的な研究が必要になりますし、また、現場とのつながりを重視するという観点からすれば、実践的であるということもたいへん重要な意味を持っております。そのため、この研究科では、「大学と社会を結ぶプラットフォーム」として「発達支援インスティテュート」という附

属研究組織をもっています。ここでは、例えば、子育てに関わる問題を多くのお母さん方と一緒に解決していくという部門、神戸の震災体験を踏まえ東日本大震災後の街づくり支援をする部門、あるいは、本研究科には理系の先生方も多数おられますので、多様な専門的な科学的知見を動員して地域の環境問題に取り組む部門などが含まれています。

そして、今回、この「発達支援インスティテュート」に新しく加わったのが、アクティブエイジング研究センターです。

先ほども申しましたとおり、本研究科は乳幼児期から高齢期に至るまでの「人間の発達」を対象としていますから、高齢期の「人間の発達」についても組織的に研究をする部門が必要とされてきました。そこで、これまで、学問分野を異にしながらも、高齢化に関わる様々な問題に関心を持ち個々に研究をされてきた教員の力を結集し、そこに「アクティブエイジング(活力ある高齢化)」という実践的なテーマを掲げることで作られたのが、このセンターです。

高齢化という現象は、むしろ、医学等の進歩によってもたらされた人類の一つの成果ですが、それにもかかわらず、現実には、深刻な社会問題の発生ともつながり、様々な課題を含む領域とも言われております。それだけに、このセンターで営まれる学問的営為は、様々な高齢化や高齢社会の現場とのつながりを強めつつ、学内外の多くの関係諸機関と連携しながら、先駆的で実効性ある成果をあげ、そのことをとおして、グローバルな形で多大なる貢献を社会に及ぼしていくことが強く期待されているわけです。もちろん容易な課題ではありませんが、一丸となってがんばっている所存です。

産声をあげたばかりのセンターでございます。本日お越しのみなさまには、暖かくお見守りいただき、これまで以上にご支援・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。研究科長としての挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。